

口演 | 整容

■ 2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 ■ 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:00 ~ 14:08

[27-O-I002-01]

高齢者に対する口腔ケアの取り組み
OHATによる口腔ケアの実践と口腔ケアの効果

栃木県 ○秋山 友子, 小野 充, 岩瀬 明日香, 渡部 康仁 (老人保健施設 同仁苑)

14:08 ~ 14:16

[27-O-I002-02]

笑顔とQOLの向上に繋がった食事レクリエーション
愛知の文化モーニング

愛知県 ○伊藤 奈美 (老人保健施設かいこう)

14:16 ~ 14:24

[27-O-I002-03]

満足度アップに向けた集団レクリエーションの取り組み
部活動の導入

北海道 ○加藤 水季, 佐藤 歩実, 澤田 理絵, 伊東 伸悟, 竹内 由美子, 金澤 輝 (介護老人保健施設ゆとりろ)

14:24 ~ 14:32

[27-O-I002-04]

入浴介助の業務改善と効率性
入浴リーダーという役割を組み込んで起きた変化

高知県 ○笹村 侑亮, 竹崎 博一 (介護老人保健施設あいの里)

14:32 ~ 14:40

[27-O-I002-05]

アクティビティ導入と能動的な参加をめざして
～活動の定着化をはかる～

和歌山県 ○石橋 公仁美 (介護老人保健施設光苑)

14:40 ~ 14:48

[27-O-I002-06]

歯科衛生士による口腔ケアと肺炎の劇的減少
～所定疾患施設療養費における11年間の検討～

鳥取県 ○清水 由加利, 霜村 まどか, 大枿 真紀, 田中 敬子, 田中 淳 (老人保健施設はまゆう)

14:48 ~ 14:56

[27-O-I002-07]

気持ちいいなあ、体までぬくもったで。ありがとな
足湯で元気になった話聞いてく？

香川県 ○和田 朱雄, 八木 ひろみ (介護老人保健施設うちのみ)

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:00 ~ 14:08

[27-O-I002-01] 高齢者に対する口腔ケアの取り組み

OHATによる口腔アセスメントの実際と口腔ケアの効果

栃木県 ○秋山 友子, 小野 充, 岩瀬 明日香, 渡部 康仁 (老人保健施設 同仁苑)

高齢者に対する口腔ケアの取り組み

同仁苑 3階西棟 秋山友子 岩瀬明日香 渡部康仁 小野充

1.はじめに

令和3年度介護報酬改定に伴い、新たに「口腔衛生の管理」が設けられ、令和6年4月から口腔衛生管理の義務化がされた。当施設では今年度より、法人歯科医師とフロアスタッフが情報共有できるよう利用者の口腔状態の評価をOral Health Assessment Tool日本語版（以下OHATとする）を用いての実施を開始した。口腔環境に問題のある利用者が評価の結果、多数いることが分かった。加齢と共に唾液の分泌が減り、自浄作用が低下し虫歯や歯周病にかかりやすく、それらの影響から誤嚥性肺炎を起こしやすくなっている。今回私達はOHATを活用し、利用者がおやつ後に口腔ケアを行う習慣をつけ、磨き残しがある利用者にはスタッフが介入することによって、口腔内の改善が期待できるのではないかと考え検証したので報告する。

2.研究方法

1.目的高齢者に、積極的な口腔ケアを提供することにより、口腔内が改善し清潔を保つことができるか、OHATスコアの変化を比較することにより、高齢者の効果的な口腔ケアの知見を得ることを目的とする。

2.対象当苑西棟に入所している20名中で、歯科医師から指導の必要性の指摘のあった利用者5名とする。

3.方法

1) 期間令和6年10月1日～令和6年11月30日

2) データ収集方法毎日15時おやつ摂取後、音楽を流し歯磨きを習慣化し、個々の利用者に応じた口腔ケアを実施し、その後OHAT評価をする。

3) 分析方法 1週間ごとにOHAT評価を実施し口腔ケアの実施前と実施後のスコアを比較する。OHAT8項目（口唇、舌、歯肉粘膜、唾液、残存歯、義歯、口腔清掃、歯痛）のうちスタッフが介入できる（口唇、舌、歯肉粘膜、口腔清掃）の4項目にする。

3.結果

個々に合わせた口腔ケアの質を高めるためOHATで評価しケアを実施した結果、対象利用者の口腔衛生状態の改善が見られた。特に粘膜の指標である、口唇や舌・乾燥状態を示す唾液や歯面を中心とした清掃状態でどの対象者においてもスコアの低下が認められた。

A氏：開始前のOHAT評価は4点。口唇にひび割れがあり舌苔付着あり。歯磨きは自分で行っているがリウマチのためうまく磨けていない。A氏は歯磨きは自分で行いたいという思いがあり歯磨き終了後に声掛けを行い口腔ケアを行った結果4週間後には口唇のひび割れ舌苔の付着は改善が見られOHAT評価は1点に改善された。

B氏：OHAT評価3点。口唇の乾燥と歯石の付着が見られた。左部分入れ歯があり残歯がある。認知症と半側空間無視があり嗽がうまくできていない。15時の介入時には歯ブラシを渡し声掛けを行い終了後は口腔内チェックを行った。4週間後にはOHAT評価1点に改善された。

C氏：OHAT評価4点。口唇・歯肉粘膜乾燥、舌苔付着あり。脳梗塞後遺症による左半身のマヒ

がありADLは全介助を要す。15時の口腔ケアを重点的に行った。実施前に声掛けと決まった音楽をかけ、「これから歯磨きの時間」という認識が出来るよう環境の調整を行い口腔ケアを実施。4週間後には拒否なく実施することが出来てきた。OHAT評価も1点に改善された。

D氏：OHAT評価6点。舌苔付着、強い口臭、歯肉出血あり。義歯は使用していないが認知症があり嗽がうまくできない、はじめは自分で行ってもらい途中から介入し仕上げ磨きを行った。4週間後にはOHAT評価2点。若干の口臭は残ったものの改善された。

E氏：OHAT評価1点。口腔内に食残渣がみられた。認知機能の低下もあり、声掛けを行い自分で歯磨きを行ってもらい最後にチェックを行う。4週間後にはOHAT評価0点。介入したことで改善がみられた。

15時に音楽を流し、口腔ケアの時間であることを知らせる。開始当初は拒否が見られる利用者もいたが、徐々に音楽が鳴ると「歯磨きの時間」と催促してくる利用者も出てきた。自分でやっている方は、口腔内を確認してほしいとスタッフに声掛けしてくるようになった。開口が難しいB氏・C氏・D氏は、歯科医師により事前に指導を受け、介入しているスタッフはできるようになっていった。

4.考察

今回研究の対象になった5名はOHATの総合得点は改善されているという結果が得られた。改善が認められた理由として、口腔環境の評価においてOHATを利用することで、医療者やスタッフ間で口腔環境を数値化し統一認識を持つことができた。認知機能の低下した利用者の場合、口腔ケアを行うことを説明しても協力が得られず、易怒的になったり嫌がってしまい中々実施することが難しい。1) 枝広は「口腔ケアを説明しても協力が得られないような人は、毎日口腔ケアを行う場所を決めておき、視覚的情報、音情報から口腔ケアを受け入れてもらうという方法もある」という事から、同じ場所、決まった時間に音楽を掛けることで、「歯磨きの時間」という習慣性の認識が生まれ実践に至ったのではないかと考える。習慣性行為としての「歯磨き」を行ったとしても、口腔のセルフケア行為自体は見えない。しかも複雑な部分を口腔内の感覚を頼りに隅から隅まで清掃する行為であるため、認知機能が低下した利用者が行うのは難しい。そのため、私たちスタッフが介入し、磨き残しや口腔内の観察を行うことで、個々の問題点に合わせた口腔ケアを実践し口腔内の衛生保全に繋がり改善したと考える。

5.結論

- 1.OHAT評価を用いることでスタッフが統一した口腔評価と利用者に合わせて口腔ケアが実践出来る。
- 2.スタッフが口腔ケアに介入することで、口腔内の環境を改善する要因となる。
- 3.視覚的情報・音楽情報を用いることで「口腔ケアの時間」を意識づけできスムーズに口腔ケアを実施することが出来る。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:08 ~ 14:16

[27-O-I002-02] 笑顔とQOLの向上に繋がった食事レクリエーション

愛知の文化モーニング

愛知県 ○伊藤 奈美 (老人保健施設かいこう)

【はじめに】

私たち、医療法人 偕行会は愛知県名古屋市を中心に急性期から回復期までを担う。当施設は港区に位置し、入所100床（内一般床60床、認知症専門棟40床）の従来型の施設である。

コロナ禍より外出や面会に制限がある中、施設生活での楽しみを作っていただけよう昼食バイキングや季節の食事の提供、ご利用者と一緒におやつ作りなど食事レクリエーションに力を入れてきた。ご利用者が楽しめるレクリエーションを試行錯誤の中、何か施設生活では非日常で定期的に開催できるレクリエーションはないかと考え、愛知県の文化でもあるモーニングを開催した。大好評で定期開催となる。

また嚥下調整食を提供しているご利用者も楽しめる食事レクリエーションを企画、実施し食事への興味が表情の変化で見ることが出来、ご家族との交流の場に繋がった食事レクリエーションの効果について報告する。

【当施設の食事形態について】

(食事形態)

主食：米飯、軟飯、全粥、ゼリー粥

副食：常食、一口大、やわらか食、ミキサー食、ソフト食

(対象)

一般床のご利用者60名

(食事形態の割合)

常食（常食、一口大）49%

嚥下調整食（やわらか食、ミキサー食、ソフト食）38%

経管栄養13%

【現行のレクリエーション】

毎日短時間で行うレクリエーションに加え、運動会や紙芝居など毎月担当を決めてレクリエーションを行う。食事のレクリエーションを毎月2.3回程開催。

【食事レクリエーションの内容】

春：たけのこご飯・桜餅 夏：そうめん・かき氷 秋：じゃがバター・さんま 冬：ぜんざいなど季節に合わせた食事。

【取り組み】

1.愛知県出身のご利用者が多く、入所前に友達と毎日喫茶店でモーニングを食べていたとの声が聞かれたため、月に1回朝10:00のコーヒーと共に焼きたてのパンを提供。トッピング：あんこ、ジャム 付け合わせ：ヨーグルト 飲み物：コーヒー、紅茶、ココア、昆布茶、緑茶をメニューから選ぶ。施設でも喫茶店のような体験をしてもらう。

2.嚥下調整食を提供しているご利用者へは、自身と他者の食事を比較し、食事の満足度が低下している事を感じた。食事での満足度をいかに上げるかを言語聴覚士、管理栄養士、看護職員、介護職員で検討。家族にレクリエーション時、通常食の提供をする際のリスク説明。同意を得た上で、食事レクリエーションを行う際は常食を提供。フライヤーでコロケを揚げ、熱々のま

ま提供するなどメニューの幅を少しずつ広げている。

【結果】

食事に対し無関心で表情も乏しいご利用者が食事レクリエーションを行う事を伝えるとはにかんだ笑顔になる。コロケは食事量が低下しているご利用者への反応が良く、コロケが食事摂取量増加のきっかけに繋がった。

【家族との交流の場】

コロナ禍以降外出や外泊の機会が減り、家族での食卓を囲むことが少なくなった。食事レクリエーションを充実させ、家族を招待する企画を立案。参加頂ける家族も多く、ご利用者が家族に自身の食事形態を紹介したり、食べる姿を見ていただくことで、家族の安心に繋がった。また食事を通してご利用者と家族が交流する機会を作る事が出来た。

【まとめ】

嚥下調整食のご利用者にも楽しんで頂ける食事を多職種で検討した結果、レクリエーション時には常食を提供することで、食事への満足度を上げることが出来た。食事レクリエーションを通じて食事の摂取量が上がり、生活への意欲、QOLの向上を実感した。今後も嗜好に合わせてご利用者、家族、職員と一緒に楽しみながら交流の場を広げ、レクリエーションを通じた施設生活の充実に繋げたい。また家族との食事会に加え、外出時に家族へ同行を呼びかけ、施設外への外出のサポートも行い、施設生活の中でもご利用者、家族が安心して楽しめる生活を支援していきたい。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:16 ~ 14:24

**[27-O-I002-03] 満足度アップに向けた集団レクリエーションの取り組み
部活動の導入**

北海道 ○加藤 水季, 佐藤 歩実, 澤田 理絵, 伊東 伸悟, 竹内 由美子, 金澤 輝 (介護老人保健施設ゆとりろ)

【はじめに】

当施設では自立支援促進加算の算定を2024年7月から開始した。LIFEフィードバックデータの分析を行う中で、全国他施設と比較し、1週間あたりの趣味・アクティビティ・役割活動、居場所作りについての取り組みが不足していることが明らかになった。

【目的】

当フロアでは集団レクリエーション(以下、集団レクとする)を週2回午後30分程度行っていたが、ゲーム要素が強く、理解力や認知機能に低下を認める利用者でも参加が容易であるように易しい内容としていたため、「つまらない、内容が幼稚だ」などの理由で自立度の高い利用者が参加を拒否することが多々あった。かねてからスタッフ間では集団レク内容について改善が必要との声があり、利用者の集団レクに対する満足度アップを目的として、生活歴・趣味等の情報を反映させた部活動と称した小グループの集団レクを展開することとした。

【方法】

事前情報や利用者・家族からの聞き取りなどから得た趣味・余暇活動・習い事などのデータを収集し、部活動を音楽部、ゲーム部、書道部、折り紙部、体操部、編みもの部の7つに決定し、参加したい一部活を各利用者を選んでいただいた。小グループに分かれて活動を行い、書道部、折り紙部、編みもの部では夏をテーマにした作品を制作した。音楽部では音楽鑑賞をメインに利用者からリクエスト曲を募り、ipadでミュージックビデオを流しながら音楽を鑑賞し、鑑賞した理由やどこが好きなのかを利用者が発表する形式をとった。体操部では車椅子に乗車したまま行える体操を行い、ゲーム部では上肢の麻痺があってもカード類を並べることができる台を用いてトランプやカルタを行った。各部活の開催、曜日を固定し、それぞれ週2回30分程度で実施した。

期間は令和7年4月21日～令和7年6月13日迄の53日間とし、取り組み期間終了後に感想や意識の変化についてのアンケート、参加回数の比較を行った。データを比較するにあたり、比較対象期間は、前年度の同時期である令和6年4月21日～令和6年6月13日迄とした。

【結果】

令和6年8月～令和7年2月のLIFE自立支援加算のフィードバックデータによれば、1週間あたりの趣味・アクティビティ・役割活動について、全国(ほぼ毎日39.0～41.6%、週に2～3回22.8～23.8%、週に1回程度13.8～15.7%)、当施設(ほぼ毎日7～9%、週に2～3回20.9～25.0%、週に1回程度30.6～35.9%)と明らかな差異が認められた。

活動前のアンケート(対象48名、回答数40名、無回答8名)では、65%が今までにフロアでのレクリエーションに参加経験があり、35%は参加したことがなかった。参加したことがある方の

50%が現状のレクリエーション内容に満足と回答したが、15%が満足しておらず、その理由の多くが「内容が面白くない」、「物足りない」というものだった。参加経験のない方の主な理由は、「部屋で静かにしていきたい」「面倒だから」「体調がよくないから」などであった。

取り組み後のアンケート(対象47名、回答数39名、無回答8名)では、81%の利用者が部活動に参加しており、19%が参加しなかった。参加した利用者の43%が「楽しかった」、15%が「少し楽しかった」と回答し、満足度についても参加した利用者の82%が今回の集団レクのレク内容に「満足した」と回答した。参加後の気持ちの変化については、「気分が明るくなった」21%、「毎日が楽しみになった」17%、「誰かと話す機会が増えた」4%、「特に変わらなかった」15%と回答。「今後も参加したいか」という問いには、「強く思う」43%、「どちらかといえば思う」15%、「あまり思わない」6%、「まったく思わない」0%という回答となった。

利用者全体における対象期間中の1人あたりの集団レク平均参加回数については、取り組み前が平均4.06回だったのに対し、取り組み後は12.25回と、大幅に増加した。今まで集団レクに参加しなかった利用者の参加も増えた。

【考察】

高齢者にとってレクリエーションは、身体機能の維持・向上、認知症予防・脳の機能維持、気分転換・ストレス解消、社会的繋がり強化、生活の質向上など多様な意味を持つとされる。今回、利用者の生活歴や趣味などの情報を活かして取り組みを実施したことで、今まで集団レクの内容がつまらないという理由で参加を渋っていた利用者の参加に繋がり、全体の集団レク平均参加回数が大幅に増加した。

小グループに利用者それぞれが所属し、曜日を固定したことで、利用者自身が日課を把握し、部活動に参加する時間に合わせて準備をする姿も多くみられた。日頃、関わりの少ない利用者同士の交流が増え、フロアで展示した完成作品の鑑賞を楽しむ利用者や家族も多く、笑顔が増えた。今まで会話をしていなかった利用者間で「次の部活の時間でまたお会いしましょうね」、「次はどの曲をリクエストしようかしら」と部活動を楽しみにしている言葉もみられ、コミュニケーションの輪が広がっている。今回の取り組みが居場所づくりの取り組みとしても有効に作用していたと思われる。

【まとめ】

高齢者にとってレクリエーションのもつ意味は大きいですが、レクリエーションの内容は単一になりがちであり、ADLや認知度などが異なる利用者に対し、目新しい内容のレクリエーションを続けることは難しい。しかし、生活歴や趣味活動などの情報を活かしながら、部活動というグループ活動を続けることで、活動に参加するという意欲やコミュニケーションの活発化など多くの効果をもたらした。今後も定期的に部活動の内容をブラッシュアップしながら活動を継続して行きたい。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:24 ~ 14:32

[27-O-I002-04] 入浴介助の業務改善と効率性

入浴リーダーという役割を組み込んで起きた変化

高知県 ○笹村 侑亮, 竹崎 博一 (介護老人保健施設あいの里)

【はじめに】

当施設(入所定員89名、通所定員50名、2階療養棟は49床で主に認知症の方が入所)の2階療養棟は、以前、土曜日を除く週6回の入浴を行っていた。しかし、入浴介助中に職員が膝を痛めてしまうという事故があり、そのことを機に入浴業務の改善に着手。入浴業務を週2回に集約し、新たに「入浴リーダー」という役割を導入した。

【背景】

当施設の浴室は2か所あり、4階に大浴場・家庭浴・特浴、2階療養棟に家庭浴槽が1つある。2階療養棟の利用者は、月・木曜日は4階浴室、火・水・金・日曜日は2階家庭浴を使用し、週6回に分散して入浴を実施していた。2階の家庭浴での入浴は、夜勤明けの勤務者が介助を開始し、遅出勤務者と交代しながら、午前中に一人で介助を行う体制であった。この「一人介助」が原因で、職員が利用者の移乗介助時に膝を痛めてしまうという事故が発生した。この教訓を受け、一人での入浴介助をなくすべく、入浴業務を4階の浴室で、月・木曜日の週2回に行うよう業務変更した。

【課題と改善策】

週2回に集約したことで、満床の場合だと49名の利用者の入浴介助が必要となった。4階の浴室は午後から通所リハビリが使用するため、遅くとも11時30分までには終了させる必要があり、時間内に終わらない場合は、午後に2階の浴室を使用することとなる。職員間での入浴介助の経験や利用者に対する知識にばらつきがあり、日によっては時間が超過することもあった。夜勤明けの職員が時間外勤務になり、職員へのストレスや負担が増大する懸念が生じた。

そこで、現状の入浴業務の環境を改善させるため、入浴日の日勤勤務の職員一名を「入浴リーダー」とする役割を導入した。入浴リーダーは、他の職員と同様に業務を並行し、周囲の状況や進行状況を確認しながら次の利用者の脱衣場への誘導指示、大浴場内での洗身介助のフォローなど、タイミング・バランスを調整し入浴業務全体をまとめる役割を担っている。

タイミング・バランスとは脱衣場や浴室へ利用者を誘導する際の見極めを行い、浴室内のシャワーチェア：入浴用車いす：リクライニングシャワーチェアの比率を2：1：1とし、自立～軽介助：一部介助：全介助の利用者を2：1：1に調整することである。初期の段階では、入浴順序や使用する椅子の種類を一覧表にして共有する必要があった。また、経験豊富な職員のみが入浴リーダーを務めるのではなく、全ての職員が入浴リーダーを務めることで、利用者の身体状態把握や職員間の連携等の成長機会と捉え、複数回経験することとした。

【結果】

＜入浴業務改善から最初の1、2か月での状況＞

新しい業務内容に不慣れなため、他職員の動きを見ながら進行状況も確認し、指示を出しつつ臨機応変に動くことに混乱が見られた。

利用者のアセスメント情報(シャワーチェアなのか、リクライニングシャワーチェアのかなど)の把握不足により時間を要することもあった。この時期は、時間内に全員の入浴が完了せず、午後から残った数人を介助する状況が何度か発生した。

＜数か月経過後の変化＞

入浴リーダーを経験した職員が、その日の入浴リーダーをフォローしたり、指示がなくても周囲の状況を確認しながら迅速に行動ができるようになった。

利用者のアセスメント情報を深く理解するようになり、シャワーチェアの選択で迷う時間が減少した。個人差はあるものの、全職員の状況判断能力が明らかに向上し、効率性が高まった。

＜1年経過後の状況＞

午前中に入浴業務が終了しないことがなくなり、時間内に終了できるようになった。夜勤明けの職員が時間外勤務をすることもなくなった。

以前の入浴業務時間は月・木曜日各3時間、火・水・金・日曜日各2時間の週14時間だった。これを月・木曜日の各3時間、週6時間に集約したことで、入浴日に勤務する職員の負担は一時的に増加した。また、入浴日に多くの人員を配置する必要があるため、勤務作成が複雑化している。しかし、結果として夜勤明け職員の時間外勤務は解消され、入浴日の午後の時間帯や、月・木曜日以外の旧入浴時間帯の午前に時間にゆとりが生まれ、他業務の改善にも繋げることができた。

【考察】

今回の入浴業務改善で、入浴リーダー導入は効率化に大きく貢献したと考えられる。明確な指示を出すことで、職員の無駄な動きが減少し介助がスムーズに進むようになった。さらに全職員が経験する機会を設けたことは効果的であった。職員一人ひとりが、指示がなくても自律的な判断、行動が出来るようになり、状況判断能力が向上したと考える。今回の改善で捻出された時間を他の業務改善や利用者との関りを深める時間、職員休暇などに活用できていることは当施設において大きなメリットとなった。

【終わりに】

入浴リーダーは、誘導するタイミングやバランスを考える必要があり、介助と並行して行わないといけないため負担にはなると思うが、周りの職員でフォローしながら今後も改善を重ねていきたい。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00～15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:32～14:40

**[27-O-I002-05] アクティビティ導入と能動的な参加をめざして
～活動の定着化をはかる～**

和歌山県 ○石橋 公仁美 (介護老人保健施設光苑)

【はじめに】

当施設は・入所定員23床・通所リハビリテーション(以下、通りハと略す)定員50名の介護老人保健施設である。入所・通所利用者が活動する機会は日常生活動作・個別リハビリテーション・自主トレーニング・レクリエーションである。セラピストが介入する時間は限られており、自主トレーニング等実施していたが意欲的に継続できる利用者も少なく、また年間イベントや毎日のレクはラジオ体操・工作などを行ってはいるものの定着しておらず、受動的であり、参加せずテレビ鑑賞や居眠りをして時間を持て余している現状であった。活動が減少すると帰宅願望等の不穏傾向になりやすく、職員が対応に追われるという悪循環になっていることも改善したいと考え多職種が連携しアクティビティ導入の取り組みを行った。

【目的】

今回、入所・通所リハにおいて余暇時間を受動的なレクでなく、利用者・職員ともに興味・関心の高いアクティビティの導入し、定着化することで、利用者のQOL向上を目指すとともに、多職種が連携し職員自身も楽しんで活動できることを目的とする。

【方法】

興味・関心チェックシートの結果で1映画・音楽観賞(カラオケ) 2手作業(手芸・絵手紙・美容等) 3園芸・料理 4リズム体操(ダンス) 5将棋・麻雀・ゲームの5つの分野に分けアクティビティの導入と定着化を試みた。全職員にも利用者同様にアンケートを実施し、その結果に基づき5つのアクティビティに職員を配置、月1回以上の打ち合わせ時間を設け、メンバー間で活動計画を立て記録を残していく。利用者と一緒に参加する楽しさを体験する。

- 1 映画鑑賞会の開催日を事前に掲示板でポスター案内する
- 2 手作業はコーナーを設け、各利用者にあったものを提供する
- 3 施設内の畑で農作物を育てお世話等の役割を持ち、採れた野菜で浅漬けやおやつ作りを実施する
- 4 リズム体操(ダンス)に関しては音楽に合わせて運動を取り入れた体操やダンスを実施する
- 5 将棋・麻雀・ゲームはできる方を募り、利用曜日で対戦相手を見つけて開催する

【結果】

アクティビティ導入後の利用者の変化点を挙げる

- 1 映画鑑賞会・・・普段見ているTVでなく大型画面を使用して鑑賞することにより日常とは違う満足感が得られた。懐かしい映画を鑑賞することで回想でき表情が明るくなった。認知症周辺症状がある方が集中して鑑賞できていた。
- 2 手作業・手芸・・・定期的・継続的に手作業することで次はこんなものを作りたいなど利用者自らの要望があり、物品の準備等すすんでしてくれる利用者が出てきた。
- 3 園芸・料理・・・栽培している野菜の管理を積極的にしてくれるようになった。採れた野菜を調理・提供し、他者に褒めてもらうことでまた作りたいなど意欲向上につながった。また季節感を感じてもらおうよう、青梅で梅シロップを作り、水分補給を促し夏場の脱水予防に活用するなど健康管理も行えた。

4 リズム体操(ダンス)・・・導入時は声かけを行い非常に少人数で始めたが、次第に参加人数も増え、時間を決めることで利用者同士誘い合い自然と集まるようになってきた。音楽に合わせて自発的に動くことで明るい表情がみられるようになった。

5 将棋・麻雀・ゲーム・・・将棋・麻雀をする楽しみができ、午前・午後の生活リズムが定着した。他者との会話をせず無言で過ごしていた利用者間の会話が増え・笑顔がみられた。

【考察】

今回、フロアで過ごす余暇時間の充実を目的に5つアクティビティ導入を行ったことで、利用者それぞれが興味・関心のあるアクティビティを自ら選択・決定し、能動的に参加する変化がみられた。活動に参加することにより達成感や喜びを感じる機会ができ、次回への具体的な目標を持ち前向きな発言が多くみられるようになった。アクティビティの参加を重ねるにつれ、利用者それぞれが自分の役割を持ち、果たしていくことで自立支援や自己実現へとつながり日々の個別リハや自主トニングでは経験しにくい達成感・満足感が得られ、結果QOL向上につながると思われた。

また、アクティビティ導入をきっかけとして、職員の関わり方が身体介護・生活動作支援だけでは知ることのできなかつた個人の自主性・自己選択・自己決定を引き出そうと意識して関わるようになってきた。このように職員の意識が変わることで普段のADL場面や生活場面においても利用者の自主性を引き出す機会が増えてくるのではないかと考えられる。アクティビティを通して利用者と一緒に活動し楽しい体験を重ねるにつれ異職種の職員間のコミュニケーションも深まると期待できる。

【まとめ】

単に遊びの中で行われるレクリエーションとは違い、アクティビティケアは介護を必要とする高齢者の生活リズムを整え、QOLを向上させるためのケアの一環である。現在の取り組みは余暇時間の充実を目的にアクティビティの導入と積極的な参加を促し、施設全体でこの活動を定着化させることを主に行ってきた。

今後は一人ひとりの興味や関心だけでなく生活歴やニーズなど、その人の生活全体を捉えた情報収集を行い、その人の人生・価値観を尊重するアクティビティケアの提供につなげていくことが課題である。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00～15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハピリス)

14:40～14:48

**[27-O-I002-06] 歯科衛生士による口腔ケアと肺炎の劇的減少
～所定疾患施設療養費における11年間の検討～**

鳥取県 ○清水 由加利, 霜村 まどか, 大柝 真紀, 田中 敬子, 田中 淳 (老人保健施設はまゆう)

【目的】

当施設では平成26年4月より常勤の歯科衛生士を配置し、入所者の口腔内環境の改善と介護職への技術指導を行ってきた。これまでの11年間の取り組みを振り返り、肺炎罹患患者数の劇的な減少が認められたのでその成果を報告する。またLIFE (科学的介護情報システム) のフィードバックデータを活用し今後のさらなる取り組みの必要性についても検討した。

【方法】

平成24年4月の介護報酬改定により新設された所定疾患施設療養費の肺炎による加算算定件数と口腔衛生管理加算算定件数を比較した。

【経過】

協力歯科医療機関と連携し平成21年4月に新設された口腔機能維持管理加算の算定を開始した。平成24年4月の介護報酬改定により口腔機能維持管理体制加算と個別加算である口腔機能維持管理加算に分かれ、当施設では平成26年1月より口腔機能維持管理加算の算定を開始した。令和7年6月現在口腔衛生管理加算 (II) の加算算定率はほぼ100%である。

【取り組み】

具体的な取り組みとして、(1) 入所時に歯科衛生士が口腔内の評価をした際、全職員に分かりやすいよう、口腔内写真、口腔内の状況、ケアに必要な物品等を示したアセスメント票を作成している。(2) 歯科衛生士を中心に歯科医師、言語聴覚士、看護・介護職員がメンバーとなり口腔ケア委員会を運営し、利用者ごとの問題点の抽出や具体的なケア方法の検討、施設全体を対象とした研修会を開催している。(3) 歯科衛生士による利用者1人当たりの個別ケアの回数は月4回から月2回に緩和されたが、現在も月4回の個別ケアを継続することで口腔内環境の維持、歯牙の脱落や口腔粘膜の傷等の早期発見に努めている。また介護職員への技術指導も年2回に緩和されたが、現在も毎月1回歯科衛生士が介護職員へ指導することで介護職員への口腔ケアの重要性の周知やレベルアップを図っている。(4) 経口維持管理加算 (II) の要件である食事の観察 (ミールラウンド) に参加し、他職種と口腔内の状況を共有したり、食事形態の検討に際し助言をしたりしている。

【結果】

常勤歯科衛生士採用当初の平成26年は年間の肺炎罹患患者数は171件であり、月平均の肺炎での所定疾患施設療養費算定者は15件程度であった。5年経過した令和元年の年間肺炎罹患数は105件、月平均9件まで減少した。口腔衛生管理加算算定件数は平成26年339件、令和元年には1019件となり、口腔衛生管理加算算定件数の増加に合わせ、肺炎罹患患者数が減少している。所定疾患施設療養費で肺炎が0件の月は令和5年6月、7月、8月、令和7年2月、4月、6月であった。当施設では令和4年8月に新型コロナウイルスによるクラスターが発生、また令和6年3月、6月、12月に新型コロナウイルス陽性者が数名発生し、施設内で治療したため該当年の肺炎罹患患者数は若干の増加がみられた。

【考察】

歯科衛生士による専門的かつ定期的な口腔ケアの継続や、介護職員への指導により施設全体の

スキルアップへと繋がったことが、肺炎罹患者数減少の一因と考える。また常時歯科衛生士が施設内にいることで、看護・介護職員等の困りごとが速やかに相談できるようになり、令和3年4月より歯科医師が配置となり、歯科衛生士から歯科医師への報告・連絡・相談がスムーズに行えるようになった。

【今後の課題】

LIFE（科学的介護情報システム）の令和7年5月のフィードバックデータより、当施設は全国と比較し、むせ、舌苔、歯の汚れ、歯肉の腫れ・出血、歯周病を有する利用者が多く、義歯の必要性があるにも関わらず使用していない利用者が多いことが読み取れる。これらは誤嚥性肺炎に繋がる要素であり、今後もLIFE（科学的介護情報システム）のフィードバックデータに注視し、多職種で検討し活用していく必要がある。

【まとめ】

11年の経過で肺炎罹患者数は劇的に減少し、平成26年から平成29年までと比較すると1/3以下となった。緊急時施設療養費における肺炎による急性呼吸不全も減少した。これは加算算定要件に必要最低限な取り組みに留まらず、利用者1人当たりの歯科衛生士によるケア回数を維持し、介護職員への指導も毎月行うという、初期からの取り組みを継続したことによる成果と考える。今後LIFE（科学的介護情報システム）のフィードバックデータを活用し、改善に向けた新たな取り組みを実施することで、より一層利用者の口腔内環境の改善や肺炎予防に繋がると考える。また、肺炎による医療機関への入院を予防することで利用者のリロケーションダメージを防ぎQOLの維持に繋がると考える。今後も歯科衛生士を中心に継続的な取り組みを実施していきたい。

口演 | 整容

2025年11月27日(木) 14:00 ~ 15:00 第16会場 (シーモール 5F ホール6)

[O-I002] 整容 2

座長：中山 莉恵 (介護老人保健施設ハビリス)

14:48 ~ 14:56

[27-O-I002-07] 気持ちえいなあ、体までぬくもったで。ありがとな
足湯で元気になった話聞いてく？

香川県 ○和田 朱雄, 八木 ひろみ (介護老人保健施設うちのみ)

はじめに

高齢の利用者さんが転倒すると、身体の機能が一気に低下し、普段の生活にも大きな影響が出てしまいます。さらに、転倒をきっかけに動くのが怖くなってしまい、気持ちまで沈んでしまうことも少なくありません。

そんな中、日々のケアの積み重ねで「足元から元気を取り戻せる」ことを、今回のケースで実感しました。高価な物品や特別な医療的処置を使わなくても、足浴や入浴といった基本的なケアを続けるだけで、利用者さんの足の皮膚状態が良くなり、動く意欲も少しずつ戻ってきたのです。

この報告では、私たちが施設で実施した「足元ケア」が、利用者さんの笑顔と一歩を取り戻すきっかけになった経過をお伝えします。

[対象]

78歳女性、生活自立度A1。ご自宅で転倒され、退院後入られた他施設からリハビリ目的で当施設に入所された方でした。認知症もあり、生活全般に見守りが必要な状態でした。

入所前情報として「足の皮膚がかなり乾燥していて、汚れが目立つ」「受診を検討しては？」との情報がありました。私たちは、まずは足元をきれいにすることから始めようと、足浴と入浴を中心としたケアに取り組むことにしました。

[ケアの内容]

足の皮膚を清潔に保ち、乾燥を防ぐことを目的に、2週間にわたり以下のケアを実施しました。

- ・足浴 (週5回/月水土日)：足浴専用バケツに足を入れコラーージュフルフルで足趾間・足底・踵をやさしく洗う。乾いたタオルで拭き取り、ぬるま湯を入れ膝下までつける。コラーージュDメディパワーを入れ、タオルで先程と同様に優しく洗いました。洗浄後は、清潔なタオルで水分を拭き、ニベアクリームを塗ることで乾燥予防に努めました。1回の所要時間は約15分。
- ・入浴 (週2回/火金)：全身浴またはシャワー浴を実施。入浴後も足浴同様のニベアクリームでの保湿ケアを丁寧に行いました。

[観察したこと]

2週間にわたり、以下の点に注意しながらケアを続けました。

皮膚の状態：乾燥や角質、赤み、清潔さなどを見て確認

体の動き：歩行時の様子の変化

気持ちの変化：表情や会話、他の利用者さんとの関わり方など

結果

はじめは、足に汚れやガサガサした部分が目立っていましたが、2週間後には見違えるようにきれいになりました。特に乾燥による粉ふきや赤みがなくなり、皮膚が柔らかくなったのが印象的でした。

足元がきれいになるにつれ、「こんなにきれいにしてもろて嬉しい」「足が軽くなった」「気持ちよかった」といった前向きな言葉が聞かれるようになりました。足浴中や足浴後はとても喜ばれ、笑顔も多く、ケアの時間が心地よい時間になっていったのがわかりました。

また、移動も少しずつ変化が見られました。リハビリの効果もあり自力での歩行に移行していましたが、入所中は転倒することなく経過されました。足がきれいになって動かしやすくなったことや、ケアを通して気持ちが前向きになったことが影響したのではないかと感じています。

[考察]

今回の経験を通して、「基本的なケア」が持つ力を改めて感じました。

足浴は、特別な機械も技術もいらず、限られた時間や人手の中でも取り入れやすいケアです。なにより「足を洗ってもらう」「保湿してもらう」というやさしい時間が、利用者さんにとっては心地よく、安心できる時間になっていたように思います。

また、皮膚が整うと、不快感が減って自然と体を動かす意欲が出てくるという連鎖もありました。清潔に整えられた足は、「自分の体を大事にされている」と感じるきっかけになり、自分自身を大切にする気持ちにもつながったようです。

[これからに向けて]

今回のケースでは介護・看護・リハと連携しながらケアを進める事ができました。皮膚の状態とリハビリの進み具合を一緒に見ていくことで、「今どんなケアが必要か」というケアを職員全体で考えることができると考えます。

また、一度足の状態が整えば、入浴の回数が週2回でも十分清潔が保てるようになることもわかりました。人手が限られている現場でも、「できることを続けていく」ための工夫になると感じています。

おわりに足浴や入浴といった、昔からある基本的なケアでも、丁寧に続けていけば、利用者さんの心と体にしっかり届くことがわかりました。「特別なことをしなくても、日々の関わりで人は変わる」。そんなあたたかい気づきを与えてくれた2週間でした。「これならうちでもできそう」と思っただけいたら嬉しいです。現場で日々奮闘する皆さんと、この取り組みを共有できることを願っています。